宗像

海上神幸「みあれ祭」

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

秋季大祭斎行

～二日に生憎の天候なるも、三日間で約十四万人が参拝～

木・金・土曜日と曜日に恵まれながらも天候が懸念された本年の秋季大祭は、中日の二日に終日激しい雨に見舞われたものの、前後の一日、三日とよく晴れ、みあれ祭、高宮神奈備祭は秋晴れの中滞り無く斎行され、三日間で約十四万人の参拝者が訪れた。

十月一日

主基地方風俗舞

前日までの雨も止み曇りの予報であったが、午前八時三〇分の中津宮出御祭時には晴れ渡り、先の神迎え神事にて中津宮本殿に奉安されていた沖津宮御神璽と中津宮御神璽それぞれが輦台（神輿）に無事奉安され、大島小学校鼓笛隊の先導のもと大島港まで陸上神幸が行

海上で一年振りに再会された三宮の御座船

11月祭事暦

1日 月次祭
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社月命日祭
午前11時～
総社祭

1日 沖・中両宮秋季大祭
於＝大島・中津宮

3日 明治祭
午前10時～

15日 月次祭 併 七五三祭
午前10時 総社祭
引き続き 高宮・第二宮・第三宮祭

23日 新嘗祭
午前11時～

余滴

古来より、森羅万象すべてに神が宿ると考えた自然崇拝信仰により、我々の祖先は木や森、岩、水など自然物に対する畏敬の念を持ち、大切に守り受け継がれてきた。その遺産が現在の全国の社にある静苑「鎮守の森」である▼この「鎮守の森」といえば、日本でしか使われていない言葉と思われがちだが、国際植生学会では、世界の公用語として使われている。ところがこの我が国の象徴でもある「鎮守の森」が、戦後敗戦とともに外国の文化が入るようになり、永らく共生してきた自然の森もわずか六十年で破壊し尽くされようとしている。▼ヨーロッパのゲルマン民族の人々はかつて森を破壊してきた歴史を教訓に、森林を失うことに本能的に恐怖感を抱いている。プロイセン時代のドイツでは、宰相ビスマルクが「一本伐ったら、三本植えろ」と指示をだしたくらい熱心である▼既に、異常気象、地球温暖化、など自然界からの警鐘は鳴らされている。手遅れにならないうちに、我々が祖先から受け継いだこの偉大なる自然遺産を後世に伝えないといけない。その為にもこの静苑「鎮守の森」を守る事が私たちの責務である。忘れてはならない「人間が消えても森は育つ。しかし、森が消えたら人間は生きていけない」という事を。（中）

神具・装束・授与品
井筒
装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

われた。

港に到着した沖・中両宮の輦台が御座船に載せ終わると、午前九時三〇分先導船を先頭に御座船、供奉船と順を追って出港、港の外には波切御幣、紅白吹流し、大漁旗で飾られた約一五〇隻の漁船が待機しており御座船に続いた。

一方その頃、辺津宮では午前九時に辺津宮出御祭が斎行され、辺津宮の御神璽が神湊港に向かわれた。

辺津宮御座船が待つ神湊へ向かった大船団は、年に一度の宗像三女神再会の無事を祈る人々の思いの賜物なのか、凪の玄界灘を壮麗に進んだ。

神湊港への入港間近、海上で一年振りにお揃いになられた女神達三隻の御座船は予定地点で停船。供奉してきた船々は、「国家鎮護」の大幟を確認し順次御座船三隻を一周し宗像七浦各母港へ帰っていった。

頓宮祭

それを見送り御座船は神湊港に着御。船から降ろされた三基の輦台は、神湊の海を見渡す高台にある頓宮まで御神幸し頓宮祭が斎行された。

御座船奉仕者には感謝状と記念品が贈呈された。その後、三宮の御神璽を載せた三台の御座車は白バイとパトカーに先導され、辺津宮まで陸上神幸。定刻通り、本殿へ入御され秋季大祭一日祭（入御祭）が斎行された。

宮司祝詞奏上に続いて、保存会奉納の主基地方風俗舞が厳かに奉奏され、みあれ祭に始まる一日目を無事に終えた。

中津宮→大島漁港

神湊港→頓宮

頓宮→辺津宮

辺津宮に入御される三宮の御神璽

十月二日

流鏑馬神事、翁舞

二日は夜半より雨が降り続き、生憎の雨模様の中、午前八時から神門前の馬場道で流鏑馬神事の奉納があり、馬上の射手が地上七メートルの的に向け、次々と矢を射ると参拝者から盛んな拍手が起こっていた。

午前十一時からの二日祭では、福岡市の喜多流・梅津忠弘氏同門下の奉仕により、能管や鼓の鳴り物に合わせ能楽「翁舞」が神前に奉納され、神妙なるこの舞に多くの参拝者は足を止め見入っていた。

雨は祭典後も夕刻まで降り続き、日中は静かな境内であったが、日が暮れて雨が止むと金曜日ということもあり、仕事や学校帰りの家族連れを中心にようやく賑わいを見せ始めた。

十月三日

浦安舞

三日は午前十一時から三日祭、前日の雨により併せて高宮祭が斎行された。地元玄海中学の女子生徒四名による浦安舞が奉納され、十二単を身に纏った舞姫の姿は、詰めかけた多くの参拝者を魅了した。

三日祭終了後には、第二宮・第三宮、宗像護国神社に奉仕神職、参列者がそれぞれに進み秋季大祭が執り行われた。

午後二時からは、拝殿で南坊流瀧口社中による献茶祭も奉仕され、二代洗心庵・瀧口宗芳氏による見事なお手前が披露され、多くの門下の方々も陪席された。

午後六時には、秋季大祭を締め括る高宮神奈備祭が、高宮祭場で斎行された。前日からの雨で斎行が非常に危ぶま

れていた。しかしながら、氏子青年会関係者の熱い情熱により早旦より濡れた祭場を乾燥すべく並々ならぬ御尽力を頂き、夕刻には斎行の目途がついた。

時刻、高向宮司以下神職、太宰府天満宮神職・巫女、氏子青年会・小林栄二会長以下会員三十六名の総勢約五十名の奉仕で斎行された。

浄闇の祭場で「悠久舞」が奉奏されると一同感動の様子であった。この高宮神奈備祭で三日間に亘る秋季大祭は無事に締め括られた。

ここに秋季大祭に御奉仕頂いた皆様方、御参拝頂きました方々に厚く御礼を申し上げます。

高宮神奈備祭

宮司と氏子奉幣使の小林正義氏

流鏑馬神事

主基地方風俗舞

浦安舞

高宮で祝詞を奉上する宮司（高宮神奈備祭）

各奉仕者は下記の通り（敬称略）

◆**大祭諸準備（総代奉仕）**
田島地元総代・協力会

◆**陸上神幸・供奉**
神湊地区氏子会評議員・総代

◆**大祭受付**
宗像大社氏子会

◆**沖津宮御座船**
辨天丸（船頭 松本久人）

◆**沖津宮先導船**
第三曙丸（船頭 吉武義成）

◆**中津宮御座船**
海久丸（船頭 遠藤澄男）

◆**中津宮先導船**
大黒丸（船頭 奥 佳寛）

◆**辺津宮御座船**
健栄丸（船頭 三苫健二）

◆**花火船**
第三海漁丸（船頭 沖西一宏）

◆**報道船**
みたけ（宗像漁協大島支所）

他 宗像七浦始め周辺の各奉仕船、沖・中両宮奉賛会、同翼賛会、同敬神婦人部の皆様

◆**陸上神幸奉仕車**

御座車
西九大運輸倉庫㈱・㈱新出光・宗像地区タクシー協会

先導車
宗像観光協会・宗像地区交通安全協会・宗像市消防団第十一分団

供奉車
宗像市消防団第十二分団・玄海ホテル旅館組合

◆**主基地方風俗舞奉仕者**
〈舞方〉清水陽介、中野久志、吉田光利、松井徳一郎
〈歌方〉石津典秀、吉田敏幸、岩佐洋一、永嶋卓也、福崎武志

◆**氏子奉幣使**
小林正義（福津市福間地区）

◆**浦安舞奉仕者**
小林千穂、中野史菜、八尋美咲紀、立花沙也加

第39回 西日本菊花大会開幕

第三十九回西日本菊花大会（宗像大社菊花会、宗像観光協会共催）が、本年も当大社境内で開催されており、神郡の秋を彩っております。

質・量ともに全国屈指の菊花展で、九州各県と山口県の菊作り愛好家の方々が丹精込めて育てた菊、約三千鉢が出品されております。

種類も豊富で、大輪（たいりん）・盆栽・懸崖（けんがい）・福助（ふくすけ）・ダルマ作り・古木添え木・洋菊・千輪咲（せんりんさ）き・一文字作り・菊人形と様々で毎年観に来られる方も飽きさせません。

期間中は菊苗や切花などの販売、宗像観光協会の特産品や軽食の販売も行っております。何かご不明な点がございましたら、緑のジャンパーを着た菊花会会員が巡視していますのでお気軽にお声掛け下さい。

尚、本年は**十一月一日～二十二日**例年より会期が一日短くなっていますので気をつけてご来場ください。

『心字池 浄化の取り組み』経過報告

既報の通り、六月中旬心字池清掃を実施し池の水質改善に乗り出した。

まず、池底に堆積する汚泥（樹木の葉、鯉の糞）を改善するため、❶新たに濾過装置を設置、❷バイオの力でヘドロ等を分解するというアクアリフトを投入、❸水質浄化作用の見込まれる、ホテイアオイを池の一部を仕切って植え込んだ。そして九月には、さらに❹水の循環を促す為バイオファンも取り付けられ、稼働を始めた。

約四ヶ月が経過し、池水循環が強化され、池底に堆積する汚泥の量は減少したものと見受けられるが、現在も池は全体的にまだ濁ったグリーン色である。しかし、水質は少しづつ改善されつつあるようで、生気を失っていた鯉達も活発さを取り戻し、次々と稚魚が生まれ蘇りの兆しをみせつつある。

水温が下がるこれからの季節は良いが、例年水質が悪化する六月、さらに酸性雨などの不安要素もあるが、導入している様々な試みをじっくりと検証し、美しい心字池を取り戻したい。今後の経過報告を期待いただきたい。

稼動するバイオファン

稚魚も続々と育っています

植え込まれたホテイアオイ

表千家々元奉仕 献茶祭斎行

～約五〇〇名の同門会関係者が参列～

十月十七日、錦秋の一日を彩る恒例の献茶祭が斎行され、県内はもとより山口・九州各県の同門会員をはじめ日々茶道に勤しむ人々約五〇〇名が参集し、和服姿の女性達で神苑は終日華やかな雰囲気が漂った。

献茶とは神仏にお茶をお供えする儀式であり、神郡宗像においても神前に茶を供える献茶祭が催されていたが、表千家々元直々による献茶の儀は、昭和三十七年当時の宗像大社復興期成会々長出光佐三氏の御尽力により実現、第十三代表千家々元即中斎千宗左宗匠が初めて奉仕されて以来、毎年出光家の奉納により行なわれ、今回で四十六回目を迎える。

祭典当日、早朝より爽快な秋晴れとなり、定刻十一時、一鼓を合図に当大社神職三名、第十四代表千家々元而妙斎千宗左宗匠以下介添の家元関係者、出光興産株式会社名誉会長出光昭介氏、また本年より就任された西高辻信良同門会々長（太宰府天満宮宮司・福岡県神社庁長）外関係者は祓舎にて修祓を受け本殿へ参進、所定の座に着座し祭典開始。

斎主が茶道の興隆と「茶の聖・千利休」の正統を受け継ぎ、四百余年の伝統を誇る表千家の隆昌、同門会の繁栄を祈念する祝詞を奏上、続いて献茶の儀が執り行われた。

家元は拝殿に設けられた風炉前に端座、切柄杓の手許、袱紗さばきも鮮やかな「動と静」とが見事に調和した淀みない清らかな御点前が披露された。

家元の御点前を拝見しようと拝殿周辺に詰め掛けた大勢の拝観者は、一拳手一投足を見逃すまいと、真剣な眼差しで見詰めていた。

咳き一つない張り詰めた静寂に包まれる中、金の椀に濃茶、銀の椀に薄茶の二服が点てられ、雅楽の調べが流れる中神職の手により御神前に奉献され、宗像大神の神慮をお慰め申し上げた。

献茶の儀に続き斎主、家元、出光昭介名誉会長、西高辻同門会々長が各々玉串拝礼を行い、一時間余に及ぶ本年の献茶祭も厳粛裡に滞りなく終了した。

祭典後、参列者は儀式殿に設けられた「出光副席」、斎館に設けられた「同門会副席」へ参席、茶席に掲げられた掛軸や茶道具の逸品を観賞しながら、お茶を戴き「侘・寂」の境地に浸り、至福の一刻を楽しんだ。

また参列者への便宜を計るため、宗像観光協会に依頼し昼食ブースを準備いただいた。うどん等の食事ブースに長蛇の列ができたのをはじめ、神社側も清明殿を休息場として開放し好評を博していた。

家元による御手前

家元の佐法を見詰める参列者

出光名誉会長

西高辻同門会々長

東京・出光美術館より運ばれた逸品を愛でる参列者

儀式殿での出光服席

清明殿で休息される参列者

今年出店した観光協会のブース

斎館での同門会副席

兵庫県立考古博物館特別展
「古代祭祀の世界」展へ神宝を出陳

現在、兵庫県立考古博物館特別展「古代祭祀の世界」に当大社神宝沖ノ島祭祀遺跡出土品が出陳され話題を呼んでいる。

本展では、縄文時代から奈良・平安時代までの古代人の精神生活（信仰）に着目し、それに関わる多くの祭祀遺物を紹介している。自然と対峙し生命の誕生と豊穣を願う原始的な祭祀、稲作文化の下に現れる農耕祭祀、古墳での葬送儀礼としての祭祀、国家形成、確立後の律令に基づいた国家的祭祀など、各時代の様々な信仰のあり方を説き明かす展示で、精霊や神々に祈りを捧げた古代人の精神世界の神秘に迫る興味深い内容となっている。

沖ノ島の祭祀遺跡と出土品は、古代国家が関与する祭祀の変遷をたどれる唯一のものとして本展覧会の核となっている。この度の出陳品は、三角縁神獣鏡、金製指輪、金銅製龍頭、金銅製杏葉（いずれもレプリカ）、碧玉製釧、各種玉類、子持勾玉、金属製人形、滑石製形代（人形・馬形・舟形）、土器など内容は多岐にわたる。こだわりある有意義な展示で、特に、当大社神宝の持つ、古墳時代以降に展開した国主導の律令で規定される祭祀（律令祭祀）の先駆け的な要素と、平城京、平安京といった都城などで営まれた律令祭祀の主体となる祓の祭祀との関連性に焦点をあてて、古代国家の選択した精神世界を強調している。

十月三日に行われた本展開会式には当社職員が来賓として出席。展覧会初日とあって多数の方が押し寄せ、晴れやかな秋空の下に華々しく開会した。本展は十一月二十九日まで開催される。秋の播州は考古学ファンで賑わいそうである。

神宝の解説を熱心に聴く拝観者たち

開会式には多くの方が集まった

テープカットの様子

展示風景

宗像大社刀剣展のご案内

当大社の奉納刀を中心に約60振の刀剣と
絢爛豪華な刀装具を公開します。
刀匠の技の結晶を是非ご堪能下さい。

会期 11月1日(日)～23日(祝)

会場 神宝館1階展示室

時間 9時～16時30分

拝観料
- ●大人 500円
- ●大学・高校生 300円
- ●中・小学生 200円

15名以上は一名につき100円引き

※なお、展示替え作業のため下記日程で休館します。
ご了承下さい。

平成21年10月29日(木)～10月31日(土)
平成21年11月24日(火)～11月27日(金)

（続）海の寄物

241

いしい ただし

ししぶ駅のポールの上の彫刻をつづけよう。

稲　朝鮮半島から直接北部九州沿岸に伝わったのは前四、五世紀ごろであろう。学者によって前後差があるが、彼等は朝鮮半島から直接やってきて沿岸の各所に住みついていったと考えられる。まだまだ考古学の研究によっては古くなる可能性がある。

福岡市板付遺跡、糟屋町江辻遺跡、新宮町夜臼遺跡、古賀市六ツ坪・百田遺跡、福津市の今川遺跡は、初期農耕遺跡である。玄界を渡ってきた人達は川口部あたりに居を構えながら縄文人達と接触、交流を深めながら、更に稲作に適した場所を求めて内陸部へと異動していったと思われる。

とにかく日本での食の大変動、いわゆる米を食べるようになったのは縄文末から弥生時代にかけてである。

稲穂

古賀市・鹿部田渕遺跡　大型建造群　6世紀

ししぶ駅周辺は丘陵あり水田ありと豊かな農耕地帯で、秋には瑞穂が頭をたれていた。さて駅名としてししぶの地名と鹿部山は残ったが新団地をきっかけに美明の町名になった。歴史で屯倉というのを習ったことと思う。広辞苑で調べると「ミは接頭語。ヤケはヤカ（宅、家）の転、屋舎・倉庫の意」とあり「大和朝廷の直轄領から収穫した稲米を蓄積する倉・転じて朝廷の直轄領。官家、屯家、屯宅、三宅などともかく」とある。鹿部田渕遺跡は鹿部土地整理事業に伴い発掘が行れ、大型住居の柱列群が発掘され、これが日本書紀に記載されている継体天皇二十二年（五二八）の磐井の乱に敗れた磐井の子、葛子が献上したミヤケではないかという説があり、新町名の美明は屯倉をかけたものである。

ポールの鮒はこの地の一画に鹿部大池があったところで、埋め立てられてなくなったが、江戸時代、朝鮮通信使が相島に寄った時に、大池には鮒や鯉が飼われ、相島に通信使が到着すると烽火をあげて、鮒鯉を運んだという。

フナ（鮒）

蓮花池には夏になると蓮花が咲き、それは非常に美しかったという。平成二十年発行された「鹿部区史」の本文や裏表紙にその蓮花の写真が掲載されているが、蓮花は小振りで、茎の部分が長かったという。

ポールの上の甲冑（よろいかぶと）は古賀バイパスの新宮町と古賀市の境にあった永浦古墳群四号円墳の石棺から掘りだされたものである。時代は五世紀中ごろ、甲すなはち三角板鋲留短甲（鉄板を切り、鋲でとめた）。冑は眉庇付冑といい、ひさしがつく。他に頸甲、肩甲などがセットになっている。

埋葬された人は、たくさんの剣、刀のほかに鹿角装短剣や工具の鉋、鉄斧、鉄鏃等をもち、それに小さな素焼きの壺一個、金製の耳環が副葬されていた。石棺の石材は相島産の玄武岩が用いられている。出土品を見ると「もののふ」「つわもの」という言葉がぴったりで恐らく玄界灘を勇躍渡っていった人達の一人であったろう。

甲冑

横矧板鋲留眉庇付冑

第五七九回 宗像大社歌会詠草

大野展男選毎月25日〆切

北九州市　八幡西区　吉田ウト子

身を隠すものなどあらぬ夕空を並みゆく鳥の羽裏ま白し

評 自然の中に己を投影した一二句に特色がある。それ故に「並みゆく」と複数にしないで「とびゆく」と一羽の鳥に焦点をしぼりたい。

宗像市　日の里　石松　弘次

例会に妻出でゆきし昼下り独り居われのこの静ごころ

評 老夫婦二人きりの暮しのなかでたまたま一人になった時、己を見詰めた男子たるものの心境。大方の男子の共感を得るだろう。

北九州市　八幡西区　豊田　光子

過ぎゆきし波紋は胸にしまひおく紅茶に添へたるレモンが匂ふ

評 上句と下句の対比が醸し出した詩情。ただ三句を生かすには波紋を起したのが己なら初句は「起したる」他人なら「起りたる」。

宗像市　田久　巻　桔梗

われいまだ修行足らねば経誦すと傘寿の旅僧高宮に坐す

評 一二句の詠い出しは、いかにも巻さんらしく好感が持てるが、添書きから「修行まだ足りぬを嘆き玉砂利に坐して経誦す僧傘寿とぞ」の詠み方もあるだろう。

宗像市　東旭ヶ丘　天野　玲子

こみあぐる怒りぶつける術もなく雨降る中をひたすら歩む

評 達者な詠みぶりであるが「雨降るなかを」が短歌という型式にはまり過ぎているのでは。

うきは市　浮羽町　向　則正

われわれに良く似しチベットの青年の息長き歌を魅せられて聞く

評 蒙古斑を持つものの親近感とモンゴルのあの息を長く引く歌への思いが一首にある。

福津市　若木台　野間　精一

白玉の小さき団子を五つづつ妻と食ひたり今日敬老の日

評 平和な老夫婦の姿が見える。それゆえに結句は「敬老の日を」と定型に納めたい。

宗像市　大島　杉田　禮子

魚造る我が傍に立ち手伝うと孫は水出す係りを始む

評 成長した孫をよろこぶ作者、魚を造るとはさしみにすることではないか、一二句を「魚を割く我がかたはらに」としたい。

宗像市　日の里　大和美由紀

やはらかき日差しこぼるる杉木立青き彩せし鞍馬苔映ゆ

評 純叙景歌だが鞍馬苔の個有名詞が一首に生気を与えている。

福津市　星ヶ丘　佐々木和彦

浮き島のごとくに立花山が見ゆ驟雨の後の靄ながるるに

評 出来上っているが、キャリア充分の氏としては物足りない。もう一つ突っ込んだ歌を見せて欲しい。

北九州市　戸畑区　田中ハツセ

秋風に大きゆるる芙蓉の花花がらもあり未だ蕾も

評 芙蓉の花に焦点をあてて詠っているが、花、花がら。未だ蕾はそれぞれ重複感があり二句以下「紅芙蓉花がらもあり蕾めるもあり」として花全体の動きを出したい。

宗像市　土穴　山本　静子

酔芙蓉移して初のあした咲く蕾の先っぽ近々と見る

評 「初のあした咲く」は無理な表現、「酔芙蓉移して初の花咲きぬ花の先っぽ近々と見る」と、順直に述べることが大切。

宗像市　田野　森　甲子

久々の雨に畑は潤ひてかんらん苗を売る声ひびく

評 詠わんとする気持は判るが、かんらんの苗を売る声が何処からするのか肝心なものが欠けているのが残念。

福津市　中央　池浦千鶴子

この夏の野菜不足かニガ瓜に虫喰いあとの点々と見ゆ

評 この歌もニガ瓜が何処にあるか判らない。例えば一二句を「野菜不足の夏の店頭」とすれば判る。何が何処でどうしたが歌の基本である。

福岡市　中央区　相良　公子

両肩の力を抜いてながめればポーチュラカ咲く日々草咲く

評 咲く、咲くと重ねた技巧は仲々のものだが、これも何処をながめたのか判らない三句を「見る庭に」とすればいい。

福岡市　南区　井田有久衣

禁漁区の立札無視し少年は池に釣糸じっと見守る

評 素直に詠っているのがいい、歌は素直が一番大切ある。私の師宮柊二も「わが歌は田舎の出なる田舎歌素直懸命に詠ひ来しのみ」と晩年に詠っている。

宗像市　東郷　山口　節子

最後まで職場を守れの命令に犠牲となりしサハリン遥か

評 戦争下のことだから職場より持場がいいのでは、ただこの叙し方では単なる聞き伝えの歌にしか過ぎない。戦の歌は実際体験こそ大切なのである。

福岡市　南区　加野シノブ

こすもすの風の吹くままゆれうごく新政権よ世界の中に

評 結句の「世界の中に」は歌の表現としては突飛すぎるので「新政権は今生れたり」とする。

選者詠

眠れざる吾がため柊二先生に習ひ継ぎしこの小詩型
その柵をくぐって来いと手招くは七年前に死にし友なり
病棟の窓近くきて法師蟬げに人間に親しげに啼く

第五五四回 俳句作品集

福津市　勝浦　高山　睦子

芭蕉葉の騒ぎて雨を呼びにけり

宗像市　東郷　田中　憲象

砂混じり汗を拭いて小麦の粉

宗像市　光岡　白土　凌一

賑やかに秋を彩る虫の声

宗像市　日の里　花田いつ枝

艶めきて今が本気の秋茄子

編集後記

神道、神社、政治、戦争等、気まぐれに様々な話題をこの欄で触れてきましたが、最も反響があったのが実は小生の引っ越しでした。様々な方から「引っ越したの」と声をおかけいただきますが、季節が過ぎていくうちに自然豊かないい場所だと実感しています▼バッタやカエル、先日は大きな蛇の抜け殻が、全身そのままの姿で庭にありました。「仲秋の名月」には物心つき始めている愚息と月も観ました。コオロギが鳴く中薄や団子を供えて、満たされた時間でした▼毎夜、小生が斬られ役を務めるシンケンジャーごっこ（チャンバラごっこ）も、周囲に迷惑をかけることなく、思いっきり斬られています▼結婚し愛妻に勝ってはいけないことを知りましたが、愚息にもけっして勝ってはいけないことも最近分かりました。いろいろなことがしっかりと分かるまで、しばらくは悪役、負け役に徹しないとならないようです。（塚）

発行所 宗像大社社務所 宗像会

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ

毎月1日発行 定価1年送料共1,000円